同和問題（道徳）学習指導案

平成３年６月２５日（火）第５校時
板野中学校３年Ｂ組
男子１８名　女子１９名　計３７名
指導者　　仁　木　真　之

１．主　題　　人間としての生き方を求めて

２．主題設定の理由

昨年度より同和問題を学年全体で取り組んでいくことができるようになった。多くの友の前で自分の思いを語り考えていくことの苦しさと喜びを知った。その中から同和問題学習を自分の問題として積極的に取り組む姿勢や差別解消に向けての熱い思いが生まれつつある。対象地区の生徒にとっては自らの置かれた立場を自覚し苦しい思いを語りつつも差別に立ち向かおうとしていくことであり「同和問題学習なんかもうしたくない。」と涙を流しながらも「逃げてはいけない」と自らを励まし友との連帯を深めていくことでもある。また、地区外の生徒に問っては自分の心に奥底にある差別心を見据え、それを洗おうとしていくことである。

「学習会の事なんかを聞かれるとドキッとしながら答える。さも差別に負けていないかのように。けど、内心嫌われたらどうしようかとか、無視されたらどうしょうかとか、差別されないかとひやひやしている。気持ちの１０分の７まではこの部落差別の事には触れたくないと思っている。１０分の３は少しでもそういう気持ちを無くしたいと思う気持ち。今までは１０分の８までは逃げ出したい気持ちだったけれど今では１０分の７。１０分の１。本当に少しだけれど私にとっては大きな進歩だと思う。みんなのなまの声を聞いて『私と同じだ、逃げてはいけない』と思い始めた。みんな真剣に考えているのに私だけがそっぽを向いていてはいけない。みんなの思いを聞いていると胸が苦しくなった。そういう事を感じることができたということは私にとって大きなプラスになったと思っている。」

これは昨年１年間の全体学習を終えた後のＡ子の思いを綴ったものである。

そして３年生になり３か月。子供たちはさらに大きく進もうとしている。全体学習において、学年意見発表会において本音のぶつけあいの中から自分が地区出身であることを語り初め、父母のことを語るとき思いが胸につまり絶句してしまう姿があった。自分の、また両親の差別心をさらけ出そうとして言葉が続かなくなった子がいた。そんな苦しい中からも互いに信じあい、信じあおうとする確かな姿が見られる。「あゆみ」に地区出身であることの苦しみを綴る子が増えてきた。子供たちが本音を語り始めたとき、私は教師としてでなく一人の人間としてどうすべきかを問われ始めたのだと思うようになった。私自身

の生き方を問い続けることが同和問題学習を子供と共に考えていくこと、自らの差別心を洗い続けることにつながることであると考える。

クラスには１年２か月のあいだ登校できないＢ子がいる。また、「私は部落の出身です。」と全校生徒の前で堂々と訴えかけていったＣ子がいる。日頃行動面で問題があり学習もふるわないが「僕は弱いけど、今だったら自分が部落出身だと言いえます。」と語り初め生活面、学習面に積極的な姿勢をみせ始めたＤがいる。多くの問題を抱えつつ一人一人が互いに支えあうことなしには一歩が踏み出せないことに気がつき始めているように思う。Ｃ子が全校生徒の前で発表していくことはＣ子自身の問題であると同じにクラスの問題であると捉え話合いの場を持ったとき３分の２の生徒が積極的に賛成をした。残り３分の１が「全校生の前での発表は今はまだ早いのでは」と消極的な姿勢を示しつつもＣ子を支えようとすることには変わりがない。Ｃ子が全校生徒の前で部落の出身であることを語り同和問題にかかわる思いを語ったときクラスの全員がその思いに打たれクラス全員の問題として改めて取り組もうとするより積極的な姿勢が生まれてきた。それはＣ子と同じ立場にある子にたいしては大きな勇気を与えるものである。そんな中でＢ子も登校の兆しを見せ初めた。同和問題学習への真剣な取組みは生き方を考えていくものであることを子供たちから教えられていく。とはいってもまだまだ一歩を進めたにすぎない。自分を語ろうとしても、手があがらない。手の重さを思い知らされている子がいる。自分の差別心をさらけ出すことの怖さがふっきれていない者がいる。

資料「同和教育への希い」は丸岡さんの詩「ふるさと」の背景を語ったものであり、丸岡さんが差別を実感し、目覚め、闘っていくに至る経過の中に、丸岡さん自身の意識の変革が見事に展開されている。詩「ふるさと」だけではつかみきれない差別の厳しさと、差別に向かって立ち上がっていく姿は生徒に共感と感動を呼び起こすに違いない。丸岡さんの思いに触れていく中で、全体学習や意見発表会の場において涙を流しながら訴えていった友の姿を板野中学校における「丸岡さん」なのだ、と感じ捉えていくことができるにちがいない。丸岡さんの苦しみは友の苦しみであり、丸岡さんを苦しめたものは同時に友を苦しめているものであり、丸岡さんの勇気は多くの人の前で自分を語っていった友の勇気であることに気付かせていきたい。丸岡さんを支えたものが真実を知ったことから来る怒りであり、仲間の支えであるならば今板野中学校において同和問題をどのように捉え、何をしていかなければならないのか、それを生徒と共に考えていきたいと考え本主題を設定した。

3．ね　ら　い

丸岡さんの生き方通して自らの生き方を問い、差別解消に取り組む態度と姿勢を育てる。

4．視　　点　　人権と差別

5．指導計画

① 常時指導　朝始業前の教室における生徒との語らい、生徒が書いた分量より多くの返事を書いていきたいと思う「あゆみ」を通じての会話、給食、清掃での共同作業、欠席時の家庭訪問、朝夕の短学活の充実など、日常の当たり前の活動を重視するとともに学年通信の発行によって生徒相互、家庭、学校の連携を図り、常にあいての立場を考え、互いに支えあう学級集団を作り上げていく。

② 関連的指導　学級会活動「オリエンテーション」……2時間
自分の思いを大勢の前で語るための前提条件としての話合いの基本的な形を身に付けることによってより洗練された同和問題学習の話合いの充実を図る。

③ 核心的指導　道徳「自分以下を求める心」……2時間
道徳「同和教育への希い」……6時間（本時　2／6）
丸岡忠雄『ふるさと』の背景を考えるなかから、仲間とともに差別解消に向かって立ち上がる実践力を育てたい。講演の記録を3つの部分に分けて指導する。各部分に2時間を当てることとした。

④ 発展としての関連指導

学活「自分の未来設計」

中学卒業後の自分の生活を考え、夢や希望の実現のために何をしなければならないか、また何が必要かを考えさせる。とくに地区生徒にたいしては同和問題から眼を反らせた生き方でなく正面からそれを見据えた生き方を考えさせたい。

⑤ 常時指導（発展）

3年生には常に進路の問題が付きまとう。今はそう意識出来ていない部分があるとしてもいずれ必ず同話問題に直面することがある。その時になって堂々と自分の生き様を胸張って語ることの出来る子であって欲しい。どんなことがあっても負けてはならない。そのための支えあう仲間の必要性は今はよりよい学級集団を作ることにつ

ながる。生徒とともに考え行動していきたい。また、全ての子供たちに、同和問題学習は自分の生き方を問うことだということの意味を繰返し繰返し考えさせていく。

6．本時の指導

（1）目標

「ふるさと」を語ることのできなかった丸岡さんが差別に立ち上がっていく姿を通して自らの生き方を問い、仲間の支えの中で差別に立ち向かう強い意志と連帯感を育てる。

（2）展開

学習活動	主な発問と期待される生徒の反応	指導上の留意点
1．丸岡さんが「ふるさと」を語ることができるようになったのはどうしてかを話しあう。	◎　「嘆くよりも怒ることだ」ということはどういうことか。 ・　部落で生まれたことを恥ずかしと思っていたがそうではないということに気がついた。 ・部落差別を無くしていくには嘆くだけではなくて差別にたいして憤りを持たなければだめだということ。 ・　差別してきたものへの怒りと真実を見抜けなかった自分への怒りを差別解消へのバネとしていこうとする決意。 ○　「嘆き」や「怒り」とは何なのか。 ◎　「ふるさと」を語ることができなかった丸岡さんを変えていったも何か。 ・部落差別についての真実を知ったから。 ・差別に対する激しい憤りの気持ち。 ・信じあい、何でも話し合える仲間の支えができて初めて行動に移すことができた。	・嘆きとはなんであり、怒りとはなになのかをつかませ、人間として差別を絶対に許さない生き方に結びついていくのもであることを掴ませる。 ・真実を知っただけではまだ立ち上ることのできなっかった差別の厳しさをおさえる。

	○「仲間の支え」を作り上げていくものは何なのか。 ・誠実に真剣に差別に向かって闘っていこうとする姿勢。 ・苦しい中でも相手を信頼して自分の本音を語っていくこと。 ・被差別の立場に立とうとして自分の差別心に向き合い、それを洗っていこうとする姿。	・全体学習を重ねるなかで多くの友が、自分を語り始たことから今の同和問題学習があることを再認識させ決して丸岡さんのだけのことでなく今の我々の問題であることをおさえる。 ・黙っていては思いは通じない。語っていくことによって始めて信頼が生まれてくること経験の中からつかませる。
2．丸岡さんの生き方を学ぶ中から、私たちは自らの生き方のなかで同和問題をどう考え、かかわっていけばよいか考える。	◎　丸岡さんの生き方から自分は何を感じ、どう生きていきたいと考えているか話し合う。 ・丸岡さんの部落差別を絶対に許さない生き方に感動した。 ・丸岡さんのように差別に向かって闘っていきたい。 ・部楽問題から逃げず自分の差別心を無くすように考え行動していきたい。 ・仲間の苦しみや憤りを自分のこととしてともに考えていきたい。	・丸岡さんについての問題だけでなく私●の周りの友の生き方を考えることであるという視点で考えさせていきたい。 ・３年生の中にいる「丸岡さん」に学ぶ姿勢を確認する。

授業記録

T：今まで１学期、今日の日というのもあったんですが、同和問題学習をずっと続けてきました。２年生の時からやってきたんです。で、３年生になって「ふるさと」の詩を中心にして、丸岡さんの「同和教育の希い」という資料をやってきました。今日はその一つのまとめということで－近藤君がうれしそうにニコニコしてくれているんですが－資料を読んでそしていろいろなことを一緒に考えていきたい。今日は資料を読む時間はありませんから思いだしながらになります。資料は出していてください。

T：いろいろ気になるというか心に残っている言葉がある分けです。例えば「恥ずかしいと思っていた」恥ずかしいという言葉があります。あるいは「嘆くことよりも怒ることである」というような言葉があります。いろいろ勉強して来る中でこのクラスでも、全体学習の中で、あるいは学級の中で「自分は部落の生まれであるが……」というような言葉もでてきた。それぞれの立場立場で考えていけるようになったと思うんです。最初、既にプリントで学習したように「嘆くことよりも怒ることである」という言葉について考えていきたいと思うのですが、丸岡さんは自分が部落の真実、どのようにして部落が生まれたかというようなこと、そういうことを知るまでは、嘆いておったわけですけども、そこである先生に出会ってから本当のことがわかった。その先生の名前覚えている人、ちょっと手を挙げて見てください。

S：うるま先生。

T：はい。うるま先生という人。その人からいろいろ歴史なんか聞いて、そして真実に目覚めていって、その中から闘うようになっていったわけですが、その時に一番最初に感じたのが「嘆くことよりも怒ることである」という言葉ですね。これをみんなはどんなふうに解釈したか、どんなふうに考えたか

S：自分が部落に生まれたりしたことが、今まであった苦しいこととかを、心の中に隠したりするのでは、やっぱりいけないと思う。やっぱりほの差別をしている人やどうも思ってない人にも怒りをぶつけていかなければいけないと思います。どうも思ってない人も、差別をしている人に入ると思います。

S：一つだけ？

T：いや、好きなだけ言ってくれていいですよ。

S：一つは自分が部落出身であるということで思い悩むことより、部落に生まれようが、生まれまいが、部落出身者を差別している人にたいして怒り許さない、ということを訴えていかなければならない。もう一つは、泣いていたのではいつまでたっても差別はなくならない。自分自身をみつめ直し、差別している人

への怒りをもっと強くしていくべきだということ、もう一つは近くで差別されている人を「かわいそう」と、そう思うことがその人を助け差別をしている人をなくしていく努力、それが一番だと思う。もう一つは、心で思い定めていることを差別している人に訴えていかなければならない。許さないという怒りを訴えていかなければならない。そういう事を訴えていかないで差別がなくなるはずがない。

T：たくさんいうてくれた。「かわいそう」という言い方は気になるんですが。一番言いたいことは何ですか、もういっぺん。

S：心で思っていることを、差別している人に訴えていかなければならない。許さないという怒りを訴えていかなければならない。それを訴えていかないいで差別はなくならない、なくせるはずがない。

S：自分が差別を受けていることを認めてしまったら、他の人がどんなに頑張っても、自分の心から差別はなくなることはないと思います。だから差別を受けることを嘆いているのじゃなくて、自分から怒りを持って立ち向かっていかなければ世の中はかってに変わらないということだと思います。

T：嘆くというのは、自分が差別を認めることになるというようなことですか、それでいいですか。はい、ほかに。

S：単に部落　問題で悲しんでいる人と一緒になって悲しむということは人間だったら普通にあると思うけど、それだけでは差別はなくならないと思うんです。嘆くことより怒ることというのは、差別に負けてはいけない、差別がある事を憎まなければいけないと思う。

T：はい、みんな前向いて。自分の言葉で、人の意見を耳にいれながら、自分が変わっていった部分をどんどん発表していって欲しいと思います。確認したいのですが、どうも思ってない人、何も言わないではたで見ようだけでは差別になるということだと思うのですが、例えばこういう時、同和問題学習をしているときに意見を言わない、じっとしていることは差別者になるんだということと思うんですがそれでいいですか。

S：誰でも差別はいけないはずだとわかっているのに、差別があることを知っていて、ほんな自分とは関係ないと思っているのはやっぱり差別している事になると思います。

S：勇気が無いだけであって心の中では発言している人と同じような事を思っているんだと思うんです。だから差別者とは言いきれないと思います。

T：言い切れない。N君どうですか。

S：自分の立場になったら、のがれたくないけど、え－と、他の人から見れば差別しているようになると思います。

S：自分では発表しようと思って、手を挙げなくても、えーほんとにそのことを考えていたら絶対迷わないと思うから、やっぱり、ほう心になんぼ思とっても、手を挙げない子は一歩引いた感じというか、やっぱりどっちでもええような言わんでも、ほの意見言わんでもええっていう感じやから、やっぱりちゃんと取り組めてないと思います。

T：他にどうですか

S：今までは言わんかったら差別しょんと一緒じゃとか思とったけど、今先生が言よるみたいに、ほな言わん、言わん子とかは差別しょんかみたいに言われたら、ほうでないような気がして、ただ、勇気が無いから言えないと思います。

T：はい、こんなのがあるんですね。D組のNさんがあの全体学習の場で発表しましたね。いろんなことその後で言って、もういっぺん読んでみます。みんなには何度も読んだ文章になりますが。「私もそうです、というように発表できるようにしたいです。同じだからいいやと思っていても、わかっているのは自分だけであって他の人には何も伝わらない。」だから、その人が差別するとかしないとかはおいておいても、言わにゃ何にもわからん、ということですね。それから実際に全体学習の中で部落宣言をしていった人がいる、で回りが黙っておったら辛いということがある。何かいっていくということで初めて力付けられる。それが少々自分が腹の立つことであってもね。

T：それからこれは奥谷さんの書いた文でこんなんがあります。「私じゃないと一体だれが私の中の差別心をやっつけれるでしょう。自分でなきゃだれが自分の思っていることを人に伝えれるでしょう。」自分でなかったら自分の思いは人に伝えれんでないか、だから発表せん人が、発表できん人とが差別者ということではなくても、しかしはたでわからなんだら、自分の立場をはっきりさせて来た人は非常にせこい思いになるだろうということ。そういうことを押さえておきたいですね。

T：あの、ちょっとそれてしまいました。丸岡さんがそういう中から段々故郷を名乗ることができていくようになったんですが、これにしても十数年要しておるわけです。丸岡さんが自分の故郷を名乗ることができていくようになった、故郷の詩を発表できるようになったのはどういうことからそうできていくようになったのか。

S：仲間の支えが丸岡さんを変えていったと思う。今自分が何をしなければいけないのかということがわかった。みんなが励ましてくれたため、今、勇気を出して差別を無くしていかなければならない、そんなことがわかったから、本当は故郷が名乗りたいのに名乗れなかった今までに自分をみつめなおすことによって、故郷を名乗らないということは故郷を差別し軽蔑していくことであると

いうことがわかり、このままではいけないと思ったから。仲間が支えてくれたから、丸岡さんに故郷をいっていけるだけの勇気を、もっと強大な勇気が湧いてきたため、心に残っている黒いきりをなくすことによって、新たな道が開けたのだと思います。

S：丸岡さんを変えたのは自分から部落問題に取り組んでいって、自分自身がどういうふうに変わったというか、自分自身の心を見たかったというか……。

T：はい、はい、また後で言えるようになったら、言ってください。

S：やっぱり丸岡さんが差別に勝ったのだと思います。ほんで仲間の支えもあったけど、　自分自身が差別に勝ったので故郷を言えたのだと思います。
ほれは先生に勉強のこと、勉強していっきょる先生と一緒に勉強して差別がどんなものかわかって。ほれと仲間の支えもあったから。

T：他にどうですか。ありませんか。先生もその点については仲間の支えとそれと真実をしったということがあったんだろうと思うね。丸岡さんが一番最初にうるま先生から部落の歴史なんかについて学んで、それから故郷の詩なんかが書けるようになるまでというのは、ものすごい長い時間があるんよね。だから、真実、真実を知っただけでは詩を書いていくことはできなんだわけですね。それを書けるようになったんは仲間の支えです。でも、仲間の支えがあっても真実をしらなんだら、怒りの向けようがどこに向いていくかわからんてことがある。その２つが絡み合って、部落出身であることもいっていくし「ふるさと」の詩を書いていくことができるようになったんですが。じゃあ仲間の支えという言葉、みんなも全体学習の中で１８５名の中で泣きながら自分を出していった人がいる。そんなことも考えあわせて、一体仲間の支えを作り上げていくものは何なんだろうか、自分の一番弱いところをさらけ出していけるような、そういう仲間の支えを作り上げていく一番大切なものですね。私たちの、みんな一人一人の生き方を考える上でも大切なんじゃないか。みんなのほうを向いて大きな声で言ってください。

S：はい。と、今までの全体授業であったらその２時間でおわって、後で何も残っていなかったように思うけど最近の全体授業はその２時間が終わっても友達と一緒に今日の授業についてのこといろいろ話していくようになって、やっとできるような感じになってきました。だれかが言ってくれると思いよったら、見るだけの授業におわってしまって、ふかい授業になってなかったと思います。

S：今までみんなで部落問題にかかわってなんか少しずつみんなの考え方が、部落に対する考え方とかも変わっていったし、少しずつ自分の本音を言うことによってそれを聞いた人はほの言葉からいろんなことを学んで、その人と繋がりができていったし。ほうやって、今は自分は部落出身とか言っても、周りの人

が支えてくれると思うから、本音とかも言えるようになってきた。

T：学年での意見発表会のときに自分のこと、しゃべっていった一番大きな理由は？

S：みんなが、みんなにゆうても、やっぱり、信用があった。どっかに、信用があったから言えたと思う。

S：2年のときから同和問題学習に取り組んできているけど、この1年と少しやってきて、何かみんな友達が段々変わってきたと思います。その支えが何かというと、直接心と心が通じあうようになると思います。みんな心の中で思っていることはたくさんあるから、言葉で言い表せること表せないことあると思います。でも、目を通じ合わすとか、わかるようになって。私自身も本音で話ができるようになってきました。

S：仲間の支えっていうか、信頼関係を作り上げていくものは正しい知識だと思います。どうして板中に丸岡さんが生まれたか、どうしてその人は丸岡さんのように最初自分のことを言えなかったのはやっぱりみんなが信用できなかったからと思います。実際、部落問題学習を始めたときは、まだあんまり今と比べたら真剣さがかなり違うと思います。どうして真剣じゃなかったかというと知識が足りなかったんだと思います。自分たちの中に差別を受けていた人がいることも、心の支えがどんなに大きな問題であるかもみんな知らなかったと思います。だから、二年生ぐらいになってみんなが真剣になりだしたころ、丸岡さんのように言える友達とかがでてきたと思います。

S：森口先生を中心にやってきた同和問題の全体授業や意見発表会、その中でもいろいろな人の意見や、そいう部分が板中3年生の丸岡さんに勇気を与えたんだと思います。一人一人のちょっとした言葉でも、心から言えばその人に勇気を与える大切な言葉になるなあと思いました。

T：今3年生がやっていく中で森口先生が非常に大きな役割を果たしてくれておる。それから一方で友達のなまの声で初めて考えだしていけたんだと言うようなこともあるだろう。先生たちにとっては一番こたえるのはみんなの声なんですね。だから、大きな差別という点については一杯わからんところがあるが、けれども、目の前におるだれかが将来悲しむようなことにだけは絶対になくしていきたい。それが先生自身の出発点であった。

S：みんなの支える後に勇気が追わえていって、今なら言える、自分の出身地も言える。そう思ったに違いない。もし僕が部落の人間であるとして勇気が湧いてくる。みんなの支え、勇気が湧いてくることは絶対に出身地を言うと思う。それは、ある子はみんなを信じているし、みんなは僕を信じてくれるからだと思うし、みんなで一つになり部落差別で心が負けている人たちを支えていかな

ければ出身地を言うことは無いし、差別のやまることはない。だからみんなの努力し第で、人は少しずつ少しずつ変わっていく。心の中で思っているだけで、自分のこととして考え、自分の力で声をだして差別に立ち向かっていく。そんな人間を一人でも多くではなく、全員が差別への怒りと平和への願いを取り戻せるように努力していくことで、仲間と仲間を支えあっていきたい。

T：板中の丸岡さんですね。本当の丸岡さんについては知らない。だからみんなにとって丸岡さん自身が、どうということではなくて丸岡さんと同じような形でスタートした友達がおるということ、これはもうみんなの頭の中にある分けです。その時に信じあうということは言葉としてはすっと出る分けですね。たくさんの人が全体学習の場で自分の気持ちを言ってくれたけど、それじゃ１８５名全部を信じたかというとそうではないよね。いろんな不安な気持ちがある。Ｏ君、Ｏ君が自分のことを話ていけるようになったのは？

S：みんなが自分の心にある、自分の心を信じて友達のことも信じて…。

S：今まで全体授業をしてきたけど、２年生のときだったら自分が部落ということをいわんでもいいんと違うん、と思いよったけど、今だったらみんな自分のこととして考えれるようになったけん、やっぱり……。

T：はい、そじゃねまだいっぱいあると思うけども時間もあまりないので、この資料にある丸岡さん、あるいはみんなの頭の中にある丸岡さんから気がつく、教えられると言うようなことがあれば、そういったことについて自分の考えを発表してください。

S：勉強することによって、みんなに訴えていくことができ、差別にぶつかったとき負けない心を作っていってくれるような気がします。

S：初めは欲わからないまま同和問題学習に取り組んでいたけど今は仲間の意見や心の中の本音を聞いて、何かしてしていきたいという気持ちです。私自身差別する心もまだ少しあるように思うけれど、差別で苦しんでいる人のため、自分自身のため頑張りたいと思います。

S：中２までの自分だったら、部落出身でなくて良かったとか、なんで同和問題学習ばっかりするのだろうとか思っていたけれど、中３になって部落の子のいろいろな考えを聞くようになって私も少しずつ考えが変わってきているように思います。

S：みんなが、本音とかをいっていって、私も何かみんなが一生懸命言うけん、自分もほうやって言ていかなあかんなあと思って。ほんで、みんなが一生懸命やいよるのに、何か一人外れとるいうのではあかんとおもったけん。

S：友達の部落宣言を聞いて気付いたことは、ほの部落の問題について今まで感じてなかったことを感じるようになった、ほんで思ったのはじっとしているだ

けでは何もならない。せっかくの話合いも、心のそこにあるものを明かさないのでは、本当の気持ちを言わなければ　麗事の話合いでおわってしまうし、どうすれば差別がなくなるのかの意見もだすべきだと思います。

T：他に。Mさんどうですか。

S：私は部落ち出身と言ってくれた本人の気持ちが初めはよくわからなくて…（絶句。涙を流す）

T：はい、Mさん座って。ちょっと途中でつまってしまったので、代わりに先生が言います。「私に、本当に人の気持ちがわかるときが来るのか不安な気がする。」そう書いてきたのがMさんなんです。みんなが一生懸命言うなかで自分の気持ちを考えたとき、せこーになっていく部分が一杯ある。そう考えたら、ほんまにYさんとかO君とかの気持ちを本当にわかっていくことができるんかという不安、だけど、ここが一番スタートになるんでないか、そんなふうな気持ちをもってこの問題を考えていったとき初めて本当の解決へのスタートが切れるんでないかと思うんです。どうですかOさん。

S：みんなが本音を言えるようになって私自身辛いなあと思ったり、みんなこんなに思ってくれよんだとか思ったりしました。今は同和問題学習を取り組んでいて、やってよかったなあと思いました。心から話し合えるようになったし友達とも本音を話せるようになった。今までの上辺だけだった言葉をきれいに磨いているような気がします。

S：丸岡さんの生き方で思たんやけど、僕は一生懸命に取り組んでも差別が亡くなるとは思えません。ほなけんど、僕は僕自身のために同和問題学習には一生懸命取り組んでいきたいです。

T：もう少し詳しく聞きたい。みんな顔上げて。

S：今僕は板中の丸岡さんから、今まで資料を学んできて、差別によって死んだ人があるとか学んできたけれど、あまりピンと来なかったけど、全体学習やした中でMさんやYさんが話してくれて本当に部落差別のことで、辛いとか、悲しい思いをしているということを僕自身学びました。

T：わかった。それでそのことについてN君はどう思った？部落差別がある、今ここにもあるだろう、そういうことはわかった。それについてどうおもう。どうしていく

S：僕としては全体学習の中でももっともっと本音で発言をしていって泣くのではなくて、泣く人がいなくなるように自分自身の問題としてもっともっと強気になって取り組んでいきたいと思っています。

……以下　略……